

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	施設内に事業所の理念を掲示している。また「職員連絡事項」にも理念を綴じ込み、出勤時に各自確認している。	法人理念を基にしたホーム理念があり、申し送りや研修などで随時意識付けしている。玄関にも掲示しており、来訪者にもわかるようにしている。理念を理解した上で業務につくため勉強会に参加し知識やスキルを修得してもらうようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地区の御柱祭では、目の前を通る宝船から御供をもらい、利用者様に喜ばれた。毎年恒例となりつつある地元小学校との交流会も大きな楽しみとなっている。年2回の避難訓練には、地域の方にもご協力頂いた。	自治会に加入し会費を納め、回覧板も回ってきている。また地区の活動には法人として協力金も納めている。小学生との交流ではリコーダー演奏やけん玉披露があり、踊りやハンドマッサージなどのボランティアも来訪し、利用者の楽しみとなっている。認知症やグループホームについての理解を深めてもらうための情報を回覧板に入れ、地域に回したこともある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入居を検討中のご家族にはすぐに施設入所を勧めるのではなく、できるだけ現在の生活を続けられるようアドバイスを行っている。地域の方々に向けて、回覧板で認知症の対応方法について発信している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回のペースで開催。介護保険課・包括支援センター・地域福祉ワーカー・区長・利用者家族、参加者それぞれの立場から意見をいただき、サービスの向上につなげている。	2ヶ月に1回、偶数月に開催し、利用状況や活動の報告後、意見交換などを行っている。また6月の運営推進会議ではホームの避難訓練を見学していただき、様々な意見をいただくことができた。会議の中で家族からグループホームがどのような場所か知らない人が多いとの意見があり、回覧板で地区の人々に知っていただく機会を作り理解に繋げることができた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	主に、運営推進会議の場において話をさせていただいている。	市支所の地域福祉ワーカーに随時空き情報などを伝え連携を図っている。介護認定の調査はホームで行い、スタッフが立会いをしている。外部で開催される市主催の研修には可能な限り参加し、今後、地域の会議に参加する予定がある。ホームのサービスの質を上げるため、あんしん(介護)相談員の来訪も依頼していく意向がある。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止マニュアルは、職員がいつでも手に取れる場所に置き、常に意識してケアにあたっている。安全のため拘束を希望される家族に対しては「拘束をしない介護」について説明し、理解を得ている。	防犯上の観点から夜間のみ玄関の施錠をしている。法人の身体拘束マニュアルに基づき拘束をしない介護を実践し、拘束に関する研修もあり、スタッフの人権意識を高めている。また法人で開発した見守りセンサーを使用し、事故防止や快適な環境作りに役立っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体的な虐待だけでなく言葉による虐待にも目を向け、社内研修や勉強会で定期的に取り上げている。また、常に意識できるように、職員全員が目にする場所に虐待防止の掲示物を貼っている。		

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度を利用している利用者様もいるため、定期的に社内勉強会のテーマで取り上げ、理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居契約の際ご家族と共にひとつひとつ読み上げながら、一緒に確認を行っている。すべての項目について理解をしていただけるよう、十分な説明を心掛けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会カードに意見欄を設け、口に出しにくい要望も提示してもらえるよう努めている。面会の頻度が少ないご家族には、電話で様子をお伝えする際に、要望をお聞きしている。	半数の利用者が自分の要望を表出でき、極力、汲み取るようにしている。家族の面会は年に数回から数日おきと様々であるが、面会時に気づいたことを伝えていただいたり、電話で意見収集したりしている。また面会用紙に意見が記入できるようになっており、頂いた内容を職員間で話し合い運営に活かしている。ホームの「かえて通信」を隔月で発行し、各利用者を中心にした写真などを載せ、家族に一人ひとりの日常がわかるように伝えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	問題点・疑問点は、申し送りや会議にて話し合い、解決に導く環境を作っている。また、年に2回以上個人面談を行い、職員一人一人の意見を細かく聞いている。	全体会議という方式はとらず、勤務内の申し送りやカンファレンスなどの話し合いを複数回設け、スタッフの意見を反映させている。年2回以上、職員と管理者との面談もあり、スタッフの思いを聞く場となっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	定期的に個人面談の機会を設け、職員一人一人の意見を聞き、職場環境の改善につなげている。人事考課表を使用し、各自掲げた目標に向上心を持って取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所として月に1回、他事業所と合同で年に1回以上、認知症に関する研修を開催している。また、研修の費用を会社が負担し、受講日を出勤扱いにすることで、資格取得を目指す職員のサポートを行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	相互の訪問には至っていないものの、外部の研修等に出席した際には交流を持つよう心掛けている。		

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者様のニーズを把握するため、細やかな観察と傾聴を心掛けてケアにあたっている。生活歴・日常の過ごし方などの情報シートをご家族に作成してもらい、安心感を得られるケアの提供に役立っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前～入居時、ご家族との面談を行い、疑問や要望をお聞きしながら関係づくりを行っている。入所後は利用者様のご様子を伝えるとともに、どのような生活をしてほしいか伺っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人やご家族との面談を進める中で「本当に入所が必要か」を探るようにしている。困りごとが解消される可能性があれば、在宅で利用できる他サービスの提案を行うこともある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者様の残存能力を活かせるような関りを心掛けている。日常生活の中で、やりがいや張り合いを感じられるように、利用者様が「ありがとう」と言われる機会を大切にしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入所後も関係が途切れてしまうことの無いよう、ご家族にも積極的にケアに参加していただいている。好きな時にご家族と会話できるよう、携帯電話を所有する利用者様も増えてきた。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	基本的にいつでもどなたでも面会可能なので、ご家族だけでなく、ご近所の方やご友人なども来所される。これまでの友人・知人と電話や手紙のやり取りを続けている方もいる。	近所の方や友人、遠い親戚の方の来訪がある。外部に電話をしたいときは、必要時にホームの電話を使用している。携帯電話を持っている利用者も若干名いる。徐々に身体的にも精神的にも活動が困難になりつつあるが、手紙のやり取りをしたり馴染みの美容院に行ったり、お墓参りに行かれるなど、利用者の出来る範囲で関係や習慣を継続している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者様同士の相性を見極め、快適に過ごしてもらえるよう工夫している。利用者様同士のみでのコミュニケーションが難しい場合は、職員が間に入って支援を行う。		

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所支援や在宅へ戻った後の介護相談など、サービス終了後もご家族からの相談に応じている。今年度は、ご逝去された方のご家族に対してグリーフケアを行った。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わり・心身状態の観察・ご家族からの情報など様々な視点から、利用者様のニーズを把握するよう努めている。カンファレンスでは、提供中のサービスが本人の意向に沿ったものであるか、話し合いを行っている。	利用者の半数以上が90歳以上のため身体的にも精神的にも出来ないことが増えているが、可能なことは希望に沿えるようにしている。「生活の情報シート」や「ひもときシート」を活用したり、家族からの情報をスタッフ間で共有しケアに活かしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人ができる部分と支援を要する部分を正確に見極めるための観察を行っている。得られた情報は、利用者様にかかわる全ての職員間で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ご家族から頂いた生活歴などの情報をもとに、これまでの習慣を生かせるような支援を心掛けている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	居室担当者を中心に、モニタリングを実施、その後カンファレンスを行う。ご家族の意向や医療職のアドバイスもプランに反映させている。	居室担当制をとっており、個人のチェック表や日々の生活の様子を基にして、3ヶ月ごとにモニタリングと見直しをしている。利用者の状態に変化が見られた場合はその都度見直しをしている。カンファレンス後に会議録を作成し、家族にも説明している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ひとりひとりに沿ったケアを提供するため、利用者様の表情や何気ないひとことも記録している。個々の記録は声掛けやケアプランの見直しに役立てている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時の状況に応じて柔軟性を持ったサービスを提供できるよう、ご家族の要望も把握するよう努めている。		

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	行事の際には、郷土料理を取り入れたり、地域の商店と関わる機会を大切にしている。近所の方やご家族様から山菜や農作物などの差し入れがあると、皆で下ごしらえや調理に参加する。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	訪問診療(往診)を契約されている方は、職員が同席して状態を正確に伝えるよう努めている。かかりつけ医の受診を継続されている利用者様は、ご家族に最近の状態を細かくお伝えしている。	ホーム利用前のかかりつけ医を継続されている方もいるが、訪問診療を利用する方が多くなっている。往診が月2回、訪問看護が週1回または随時あり、歯科の往診も週1回ある。外部への受診については基本的に家族が付き添うことになっているが、スタッフが付き添うことも多く、その際には受診ノートを持参し、状況が分かるようにしている。受診結果は管理者が担当職員から家族へ報告している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	些細な変化でも、看護師に報告を入れ、対応についての指示を仰いでいる。夜間・休日であっても、緊急時にはいつでも看護師・医師と連絡が取れる状態を整えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	主治医の所見により、緊急時の受診・入院の受け入れがスムーズに行っている。利用者様の入院中は随時ご家族や病院から状況を聞き取り、退院後の適切な支援につなげている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の利用者様に関しては、ご家族・医師・看護師・介護スタッフで十分な話し合いの上、方針を決定している。ケアに関してカンファレンスを行い、スタッフ全員が同じ対応をとれるよう徹底している。	入居時に「重度化対応、看取り介護にかかわる指針」を基に説明している。病院から退院後にターミナル状態になる利用者もおり、その都度家族と話し合い、同意を得てケアを開始している。今年度は3名の利用者を見取った。看取りに入る前は事前に研修し、夜勤時の不安などときにはいつでも医療職に相談ができるようになっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応マニュアル・フローシート、救急搬送時のための個人別サマリーを用意している。玄関にAEDを設置し、バッテリーの確認を毎月行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	タイムカードそばにある防災ボードで、各自出勤時に「今日の自分の役割」を確認する。停電時用の小型発電機は毎月動作確認を実施。年2回の避難訓練では、地域の方にも参加してもらう。	年2回避難訓練を実施し、6月の訓練では消防署員立会いの下、運営推進会議のメンバーにも参加していただき、様々な意見を頂いた。非常通報装置を押すと管理者や20分以内に駆け付けられるスタッフ、区長などに連絡が届くように登録されており、緊急時に対応できるようになっている。また連絡網や緊急マニュアルも整備されている。食料品や石油ストーブ、カイロ、保温シートなどの備蓄もある。	

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	親しみを込めつつも馴れ馴れしくない声掛けに努めている。個別の記録には、他の利用者様の個人情報を記載しないよう配慮している。入浴や排泄に関しては、ケアそのものだけでなく、会話する場所にも配慮するよう心掛けている。	利用者に対しては基本的には苗字に「さん」付けでお呼びしているが、同姓の場合などは名前に「さん」付けで呼ぶこともある。不適切な声掛けがあった場合、その場に居合わせた職員同士が指摘し合えるように心掛けている。また、人権意識を高めるため、「権利擁護」や「接遇」についての研修も行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	「どんな生活をしたいか」はもちろんのこと、衣類を選ぶ・飲み物やお茶菓子を決める等、日常生活の些細なことでも選択の自由が持てるような支援を心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者様がやりたい時にやりたいことをできる環境づくりを心掛けている。アクティビティだけでなく、起床・食事・入浴・就寝といった日常生活も、利用者様の意向を優先し、柔軟に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	髭剃りや化粧といった日常的な身だしなみに加えて、パーマやヘアカラーに関しても、利用者様の希望を聞きながら対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理・盛り付け・配膳・片付け・味見など、それぞれの能力に応じて役割を分担し、食事作りを行っている。地の野菜や山菜など季節を感じられるものは、できるだけ多くの利用者様に参加してもらって調理を行う。	全介助の方と胃ろうの方がそれぞれ若干名ずつおり、残りの方は自立している。食事形態はミキサーの方が若干名、刻みの方が数名で、他の方は常食である。とろみ使用の方も三分の一ほどいる。献立についてはメインの料理が事前に決めてあり、その他は当日のスタッフが考え作っている。利用者の誕生日にケーキを食べたり、寿司や鰻、おやきなどを買い求めホームで食べることもある。また郷土料理の「こねつけ」作りなどの調理レクも行っている。春になったら携われる利用者にホームの畑を耕してもらう予定がある。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	持病のある利用者様に関しては、医師や看護師への報告を行い、アドバイスももらっている。たんぱく質や塩分の制限・刻み食・ミキサー食など、それぞれの状態に応じた食事を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアの声掛けを行い、ブラッシングを自力で行うことが難しい方には職員が介助している。義歯に関しても、まず利用者様にケアを行ってもらい、就寝後に職員が洗浄・点検を行うようにしている。		

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	完全に自立している方以外はできるだけ職員が付添い、排泄の失敗を減らすよう支援している。トイレ以外での排泄がある方に関しては、排泄サイクルにあわせてトイレ誘導を行っている。	自立の方が数名で、他の方は一部介助を必要としている。また、布パンツ利用の方が数名おり、四分の一弱の方はポータブルトイレを使用している。排泄チェック表で排泄パターンを把握し、トイレへと声掛けをしている。排泄用品の使用状況に関しては逐次家族に報告するようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事や水分などで、できるだけ自然な排便ができるよう取り組んでいる。排便のあるなしだけでなく、便の状態も医師や看護師に報告・相談し、快適に過ごせるよう支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日の設定はあるが、利用者様の気分に極力合わせるようにしている。拒否がある場合は無理強いせず、時間を変更したり日を変えるなど柔軟に対応している。	特殊浴槽を利用し二人の職員で介助する利用者が数名おり、他の方は一部介助である。週に2~3回入浴できるようにしている。季節のしょうぶ湯やゆず湯なども実施し、香が楽しめるようにしている。以前、家族と日帰り温泉に出かけた利用者もいたという。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の良眠を妨げないよう、日中の活動量や午睡の長さにも配慮している。また、1日3回の訪室チェックは、温度や湿度の確認も行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	2名のスタッフが、時間帯を変えて配薬確認を行う。服薬時は「名前・日付・時間」を声に出して確認し、誤薬防止に努めている。服薬後の薬袋は、飲み残しがないか確認してから処分している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	台所仕事が得意な方、掃除が得意な方、編み物や裁縫が好きな方など、個々の好みや能力に応じた役割や活躍の場を提供できるよう配慮している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	「家に帰りたい」「お墓参りに行きたい」などの希望に関してはご家族と相談し、可能であれば協力していただく。集団で出かける事が困難な利用者様は、職員と1対1で外出を行った。	現在、車いす利用の方が三分の一、歩行器利用の方が若干名いる。日常的には近くを散歩したり、気候が良い時にテラスで外気浴をしたりしている。年間行事もあり、お花見や紅葉狩り、ドライブなど少人数で数回に分けて出掛けている。引きこもりがちな利用者にも外出の機会を持っていただくためにスタッフと1対1で近くの神社へお参りに行き、アイスを食べるなどの個別支援も行っている。	

グループホームかえて

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	「本人が安心できるように」というご家族の意向により、財布(お金)を持っている利用者様が数名いるものの、ご自身で買い物をするまでには至っていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族の了承を得ている方は、電話で自由に会話していただいている。個人の携帯電話を所持している方は、端末の管理をサポートしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	壁に飾られた写真やテーブルに置いてある草花が、利用者様同士の会話のきっかけになることも多い。食事やお茶の時間以外でも多くの方がホールで過ごすため、比較的賑やかである。	こじんまりした食堂は採光が良く、広いテラスに出ることができる。テラスではお茶会や花火を楽しむこともあるという。テラス横には畑もある。共用部分はエアコン、ファンヒーターなどで温度管理しており、寒さを感じることはなかった。それぞれのユニットにはトイレが2つずつあり、車いすでも利用できるように広い造りとなっている。浴室には特殊浴槽を1つ据え付け、半埋め込み浴槽も2つあり、広々とした空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールの脇にソファを置き、2~3人で過ごしやすい雰囲気を作っている。陽ざしのある時間帯は、窓際に椅子を運んで日向ぼっこするのが日課になっている方もいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みのある持ち物を置くことで、その人らしい居室づくりをしている。利用者様自身が掃除をしたり、気に入った写真や作品を飾ることで、自分の部屋だと感じられるようにしている。	ベッドとクローゼット、エアコンが完備されている。仏壇や利用者が描いた油絵を飾り、在宅にいた頃のような配置になっている居室が見られた。衣類にこだわりのある利用者にはベッド上部の板を外し、衣類棚を設置するなどの工夫をし、利用者本位の環境づくりをしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	それぞれの居室入り口に大きく名前を表示している。また、利用者様が使いやすいよう家具の配置を工夫したり、見守りセンサーを活用することで、安全で自立した生活ができるよう支援している。		